

Title	川喜田煉七郎によるデザイン教育活動の消長
Author(s)	梅宮, 弘光
Citation	デザイン理論. 1990, 29, p. 73-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52618
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

川喜田煉七郎によるデザイン教育活動の消長

梅宮 弘光

はじめに

1. デザイン教育活動の前段階
2. デザイン教育活動の展開
 - 2-1. 川喜田煉七郎の「構成」概念
 - 2-2. 活動各期の内容と特徴
 - 2-3. 変容の軌跡
3. 川喜田煉七郎におけるデザイン教育活動の意味

おわりに

はじめに

本研究は、建築家・川喜田煉七郎（1902～75年）によるデザイン教育活動の具体的内容を明らかにし、川喜田のデザイン教育活動とその消長の意味を考察するものである。

川喜田煉七郎の事蹟については、後述するいくつかの活動をとおして断片的に知られているに過ぎない。本稿で扱うデザイン教育活動も、そのひとつだが、まず川喜田の事蹟全体の中での前後関係を確認するためにも、その概略をごく簡単に述べておきたい。

川喜田煉七郎の昭和戦前期における活動は、大きく3期に分けられる。第1期は、東京高等工業学校付設工業教員養成所建築科を卒業（1924年）後、在学中より師事していた音楽家・山田耕柞の思想を反映させた音楽堂計画案〈靈楽堂の草案〉を制作する頃（1924～26年）から、ウクライナ劇場国際設計競

技（1930年12月25日締切）4等入賞までの計画案制作期。第2期は、生活構成研究所設立（1931年6月頃）から、続いて設立した新建築工芸学院の終焉と責任編集をしていた雑誌『建築工芸アイシーオール』の終刊まで（1936年前後頃）のデザイン教育活動期。第3期は、川喜田煉七郎店舗能率研究所を設立（1935年頃）以降、多くの店舗設計を手掛ける、店舗設計期。

近代建築史における川喜田への既往論考¹⁾は、第1期についてはウクライナ劇場国際設計競技入賞、第2期については、新建築工芸学院におけるデザイン教育活動を中心になされている。しかし、前者については無名の日本人青年がワルター・グロピウスやハンス・ペルツィヒを抑えて入賞したという出来事として、また後者については、日本におけるバウハウスの影響の一例として、その現象面に重点が置かれており、それらの内容および各期の関連性については明らかでない点も多い。

そこで本稿の目的は、第一に、川喜田煉七郎のデザイン教育活動がどのような状況から生まれたかを明らかにするために、この活動の前段階的状況を把握することである。第二に、活動の具体的内容である運営形式・カリキュラム・講師陣容を明らかにし、それらがどのように変遷したかをたどることによって、活動の消長の実態を把握することである。そして第三に、川喜田の第1期活動との関連をふまえて²⁾、川喜田のデザイン教育活動の意味を考察することである。

1. デザイン教育活動の前段階

川喜田のデザイン教育活動は、東京・銀座の三ツ喜ビルにおける新建築工芸学院の開設をもって始まると指摘されることがある³⁾。しかし、デザイン教育活動が最初からそのようなかたちで開始されたわけではなかった。ここでは、その前段階的状況を形成するいくつかの活動をたどっておきたい。

〈ウクライナ劇場国際設計競技応募案〉（1930年12月、以下〈ウクライナ

劇場案〉と略記)は、川喜田の第1期活動の主軸となった劇場計画案展開の集大成である。同案にいたる展開は、川喜田が「建築科学至上主義」と呼ぶ機能主義的制作理論を、計画案の制作という方法で追求した過程であった。それらはすべて個人的な習作であり実施を前提としないものであったが、実現性や機能の有効性といった現実的側面がないがしろにされていたわけでは決してなく、特に展開の後半においてはむしろ主要な課題であった。この課題に対する解答は、その多くを海外の先進事例や将来的技術発展への期待に負っていたとはいえ、応募図面にある動線・舞台機構・構造・音響・視界などを検討したダイアグラムに見ることができる。結果的に、同案は4等入選という評価を得た。このように〈ウクライナ劇場案〉にいたる一連の制作をとおして、川喜田は機能主義的制作理論を、実施を伴わないゆえにいささか観念的にはあるが、習得したのである。

ところで、〈ウクライナ劇場案〉を制作した時点で川喜田は次のように記している。「形態は屢々ひどくロマンチックなモダン味だけしか我々に与へない。今この内容を詳細に説明する紙数をもたない事をいかにも残念に思ふ。しかも我々の裁判(設計競技のこと:筆者註)の証拠物件はこの内容的な技術でしかない⁴⁾。「建築の仕事は恐らく今日及び明日においては一人の英雄的天才の力をまつて偉大な作品を作るといふ事から、次第にむしろ平凡化し、一般化してゆくものではないか。形態における驚くべき想像力豊富な気むづかしい、芸術家としての建築家よりも、むしろ、豊富な常識の発達した円満な技術家としての(中略)建築家でなくてはならない⁵⁾。そしてさらに〈ウクライナ劇場案〉のような作品は「時間さへつければ、だれでも出来る事⁶⁾である。

ここに表明されているのは、川喜田にとってのあり得べき機能主義の建築像である。それは、端的に表現すると次のようにいえる。建築の造形は機能に規定される、建築の制作は技術の共有により普遍的なものになる。

ここに描かれた理想と先にみた計画案制作における実際との、同時期の二つ

の建築像を比較した場合、そこには懸隔が認められる。その第一は建築の造形と機能との相関の理論が明確にされていないこと、第二は制作の普遍性が獲得されていないことである。川喜田にとって一連の計画案制作は、機能主義追求の個人的活動であったし、その発表に際しても各案の造形には言及がなかった。すなわち、〈ウクライナ劇場案〉制作の1931（昭和6）年前後の川喜田において、造形は理論として明確ではなく、また技術の共有化を前提にした制作の普遍化は、個人的制作という方法をとる限り、なし得るものではなかった。

それでは、この二つの懸隔は、川喜田の次期活動であるデザイン教育活動に課題として持ち越されたとは考えられまいか。この点については、教育活動の具体的内容をみた後に再び立ち戻ることにして、今しばらく、教育活動の本格的開始までの活動をたどることにしたい。

新建築工芸研究所は、〈ウクライナ劇場案〉を最後に計画案制作活動を停止した川喜田が自宅に設けた建築研究グループで、以後の活動基盤となった。その活動は、制作よりも調査や研究に重点がおかれていた。

一方で川喜田は、自ら「責任構成」を担当し、洪洋社より『建築工芸アイシーオール』を発行した。この雑誌は1931年11月号から1936年8月号まで続いた。その内容は、新建築工芸研究所の研究成果や後に設立される新建築工芸学院での講義内容を反映したもので、編集方針においても、質問券を綴じ込み読者からの通信を募ったり、地方の定期購読者を「アイシーオール地方支部」として組織し出張講習会を行なったりと、東京のみに集中しがちな活動を全国に広げるメディアとしての性格をもっていた。

また1931（昭和6）年半ば頃、川喜田・市浦健・水谷武彦・浜田増治・西村伊作・板垣鷹穂・仲田定之助によって生活構成研究所が結成された。設立時のスローガン「（生活に関する：筆者註）あらゆる部門をその真実の姿に引き戻しそれを新たに正しい精神と新しい感覚で構成する」⁷⁾からは、「生活」という語が「環境」という語と同じくらい広義に捉えられており、その再編成が

目的とされていることが窺われる。具体的活動としては、展覧会・講演会・講習会を各1回行なったのみと思われるが、その中では水谷がバウハウスからもたらした「構成基礎教育」が大きく取り上げられた。この研究所の活動は継続的ではなかったが、その内容と人間関係は、川喜田の教育活動に直接つながるものであった。

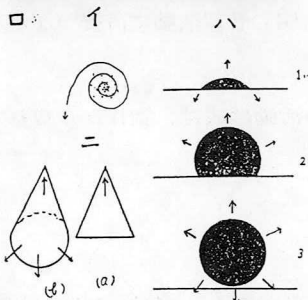
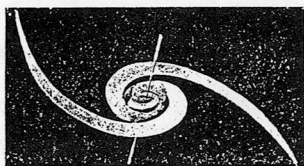
以上のように、〈ウクライナ劇場案〉制作後の活動形式は、制作から離れて調査・研究・啓蒙といった側面を強くしてゆく。

2. デザイン教育活動の展開

川喜田のデザイン教育活動が「学校」という形式をとるのは、1932（昭和7）年の6月から1936（昭和11）年の末頃までである。この間の「学校」のカリキュラムや動静は、『建築工芸アイシーオール』に逐次掲載された生徒募集広告と関連記事によって窺うことができる。本節ではそれらを総合・整理して、この期間のデザイン教育活動の全体像を明らかにする。ただし、それはあくまで募集広告を根拠としたものであり、事実とは異なる可能性もある。しかし、結果的な事実を知るための手掛かりは現在のところみあたらない。また、「学校」での講義・実習内容、それに対する受講者の評価といった、いわば体験の実態に関する手掛かりもきわめて少ない。これらの点については、今後も調査を続けたいと考えている。

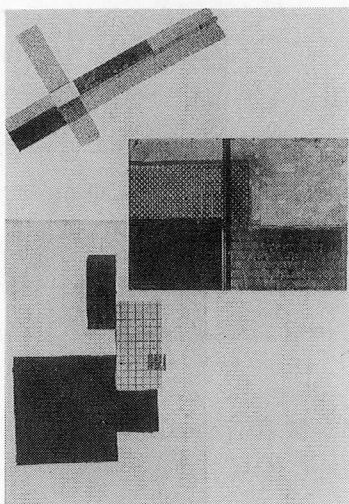
2-1. 川喜田煉七郎の「構成」概念

「構成教育」という名称が川喜田のデザイン教育活動の代名詞のように用いられることがある。その理由は、当時川喜田自身がそのように用いたことにもよるが、さらに現在にもこの名称が定着しているのは、1934（昭和9）年9月刊行の武井勝雄との共著『構成教育大系』⁸⁾がよく知られているためであろう。この書物には造形練習の具体例が多く紹介されているためか、構成教育は造形教育のことと捉えられがちだが⁹⁾、そのような性格は「構成」概念の一面でし



【図-1】「シュパヌクスの練習」

(川喜田・武井『構成教育大系』より)

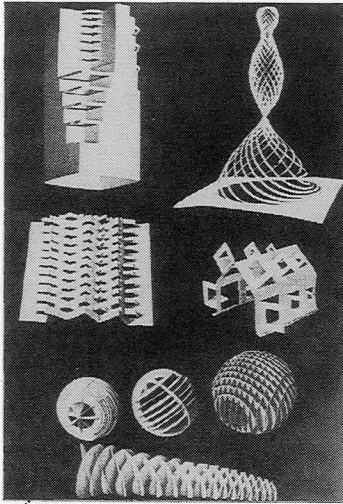


【図-2】「触覚板の作成」

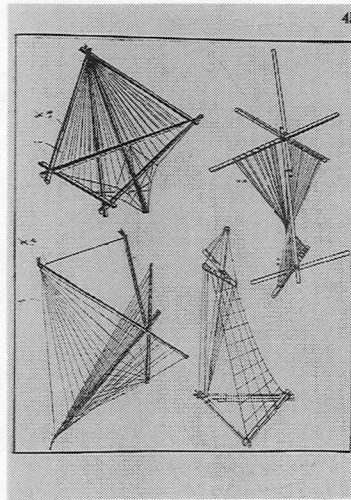
(川喜田・武井『構成教育大系』1934年、より)

かない。川喜田にとって「構成」は、より抽象的・汎用的な概念であった。カリキュラムにはこの語が頻出するので、まずその意味を確認しておきたい。

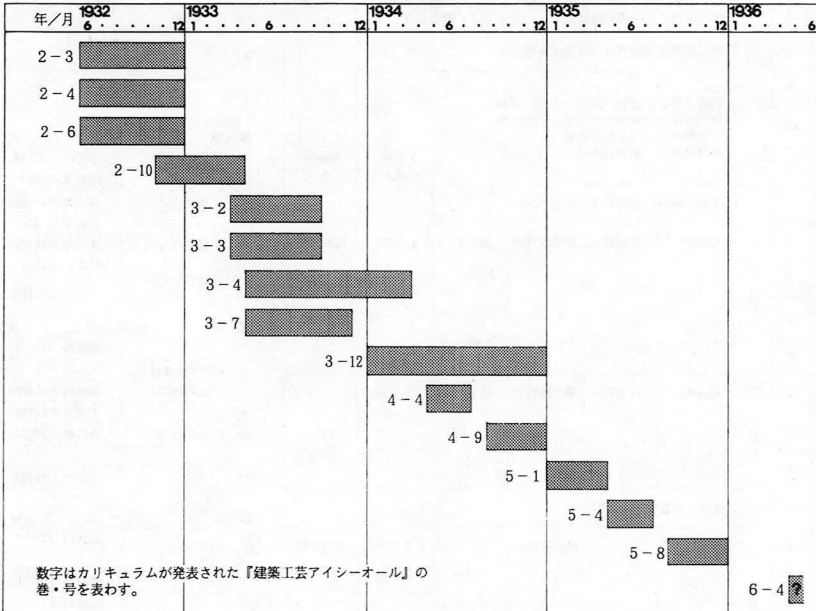
川喜田は「構成」について次のようにいう。「我々の〈構成教育〉の中心になるものは〈構成〉そのものです。これは人々の活動であり、労働であるとも云えませう」¹⁰⁾。甚だ漠然とした表現ではあるが、「構成」とは人間のあらゆる活動の総称と解釈できる。川喜田はこの「構成」を「生産構成」と「抽象構成」に分けている。「生産構成」は実用目的をもつ「構成」で、後述するカリキュラムに即して具体例を挙げると、建築・工芸・演劇・織物・洋裁などの専門分野がこれにあたる。一方「抽象構成」は実用目的をもたない「構成」で、「シュパヌクスの練習」「触覚板の作成」「穴をあけた紙」「ワリバシと糸の構成」【図-1～4】などの視覚・触覚訓練をはじめとして聴覚までも含めた感覚訓練をいい、カリキュラムでは「構成基礎教育」あるいは「基礎教育」と呼ばれる。先にふれた造形教育としての側面はこれにあたる。それではこの二者



【図-3】「穴をあけた紙」
 (川喜田・武井『構成教育大系』1934年、
 より)



【図-4】「ワリバシと糸の構成」
 (川喜田・武井『構成教育大系』1934年、
 より)



【表-1】発表された教育計画とその計画期間

【表-2】カリキュラムの変遷

年	学期	月	期	昼間		夜間			
1932	1学期	6	I期	講義：建築と家具計画の基礎的な概論 構造学概論 新興建築史					
		7		実習：パウハウスシステムによる構成基礎教育					
	休	8	休校						
	2学期	9	I期	講義：住宅・集合住居 [日照・住宅衛生・照明] 商店・レストラン・ホテル 家具計画 (1)					
		10		実習：計画の実習					
	1学期	11	II期	パウハウスシステム	住宅・家具・商店	新建築工芸 独乙語科			
		12		による構成教育 デッサン、その他	新建築史、その他	↓			
	1933	2学期	1	II期	構成教育		映画館・劇場		
			2		設計の初歩 住宅		新建築史・音響学		
		3学期	3	四ヶ月の研究員の成績及び希望により学課目を決定					
休	4								
1学期	1学期	5	III期	基礎教育 [シュバマンク練習/シュバマンク構成/ポスター練習/単化練習 (クロッキー)/明暗練習/色彩講義及練習/色彩とシュバマンクに依るポスター練習/文字単化練習/マテリアル練習/立体ポスター/触覚練習/フォトモンタージュ/切紙・折紙・穴をあけた紙の練習/総合練習/立体構成練習/ショーウィンド・舞台装置			演劇研究科 特別講座		
		6							
		7							
	休	8	構成教育夏季講習会 [昼間・夜間]						
	2学期	9	図案/手芸/服飾/家具/写真/印刷 舞台装置/ウインド/造園/住宅・商店建築の平易なる設計一般 新興建築史/新興演劇史				新絵画 研究科		
		10							
11									
休	12	図案と構成と建築の講習会 [夜間]							
1934	A学期	1	IV期	織物科	洋裁科	構成教育科	建築科	絵画科	演劇講座
		2							
		3							
		4							
	B学期	5	V期	織物科	洋裁科	構成教育科	建築科	工芸美術科	
		6							
		7							
	休	8	構成教育講習会 [夜間]						
	C学期	9	VI期				構成教育科	工芸美術科	演劇科
		10							
		11							
		12							

■ I期

	昼間	夜間
月		
火	Aクラス	Bクラス
水		
木	Aクラス	Bクラス
金		
土	Aクラス	Bクラス
日		

■ II期

	昼間	夜間
月	普通科	高等科
火		
水	普通科	高等科
木		
金	普通科	高等科
土		独乙語科
日		

■ III期

	昼間	夜間
月	昼の部	夜の部
火		演劇特別研究科
水	昼の部	夜の部
木		
金	昼の部	夜の部
土		
日		

■ IV期

	昼間	夜間
月	織物科 (1組計)	建築科 (1組・補)
火		演劇講座 (1組)
水	洋裁科 (1組計)	構成教育科 (1組)
木		演劇講座 (1組)
金	洋裁科 (1組計)	構成教育科 (1組)
土		絵画科 (1組・補)
日		

■ V期

	昼間	夜間
月		建築科 (1組・補)
火	織物科 (1組計)	
水	洋裁科 (1組計)	構成教育科 (1組)
木		工芸美術科 (1組)
金	洋裁科 (1組計)	構成教育科 (1組)
土		
日		工芸美術科 (1組)

■ VI期

	昼間	夜間
月		演劇科 (1組)
火		
水		構成教育科 (1組)
木		演劇科 (1組)
金		構成教育科 (1組)
土		
日		工芸美術科 (1組)

年	学期	月	期	昼間	夜間	
1935	A 学期	1	Ⅵ期	/	構成教育科	演劇科
		2				
		3				
		4				
	B 学期	5	/	構成教育科	/	/
		6				
		7				
	休	8	休校か？			
	C 学期	9	Ⅶ期	/	構成教育科	/
		10				
		11				
		12				
1936	休止	1	/	/	/	
		2				
		3				
		4				
		5	構成教育科	/	/	

Ⅵ期	昼間	夜間
月		演劇科(Ⅵ)
火		
水		構成教育科(Ⅵ細)
木		演劇科(Ⅵ)
金		構成教育科(Ⅵ細)
土		
日		

Ⅶ期	昼間	夜間
月		
火		
水		構成教育科(Ⅶ細)
木		
金		構成教育科(Ⅶ細)
土		
日		

*学科名、等は原文の表現を用いた。 *日付は省略した。

はどういう関係にあるのか。川喜田は「抽象構成」を「生産的な構成（労働）へ移る手ならしの間接的な予備練習」¹¹⁾と位置づけ「生産構成」に直接結び付けることを否定、その理由として「抽象構成」偏重が「生活全体から孤立した好奇的な、ロマンチックな遊戯」¹²⁾すなわち造形の自己目的化につながることを指摘している¹³⁾。

ところで、なぜここで「構成」という呼称が登場したのだろうか。それは、前節でみたような機能主義を志向する川喜田の建築思想と関連する。機能主義とは、機能という概念に人間生活や大衆社会の原理を象徴させ、それを拠り所とする制作理論であることは一般に指摘されている。この時期、それは過去様

【表-3】各期の基本データ

期	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期
名称	商業美術学校 別科 新建築工芸科	銀座・ 新建築工芸研究 講習所	銀座・ 新建築工芸学院	新建築工芸学院				
期間	1932年6月 ↓ 10月	1932年11月 ↓ 1933年3月	1933年5月 ↓ 11月	1934年1月 ↓ 4月	1934年5月 ↓ 7月	1934年9月 ↓ 12月	1935年1月 ↓ 7月	1935年9月 ↓ 12月
1学期 月数	2	2	3	3				
学期割	3 (実際 は途中で終了)	3	2	1				
全所要 月数	6	6	6	3				
クラス 編成	同課程 昼・夜 2クラス	別課程 普通・高等 2クラス	同課程 昼・夜 2+1クラス	学科別 6クラス	学科別 5クラス	学科別 3クラス	学科別 2クラス	構成教育科のみ 1クラス
入学 資格	中学卒業 以上か?	(不明)	中学3年 終了程度	高等小学校卒または中学校2年修了程度			(不明)	
入学 検定	人物+作品考査	(不明)	(不明)	無検定				
授業料 /月	5円	5円以下	2円 演劇科: 1円	1~5円 (科により異なる)			3円	
その他 の経費	検定料: 2円 記名料: 3円	入所金: 1円	入学金: 3円 演劇科記名料: 1円	入学記名料必要			(不明)	

式の参照を旨とする様式主義に対抗した。そのような状況において機能主義の側には、様式主義の旧来的な通念を払拭し、さらに人間生活や大衆社会といった現実的環境との密接な結びつきを示す必要があった。ここに新しく、かつ広範に適応させ得る呼称が要請されたといえる。

再度「構成」概念に戻れば、「抽象構成」はそのような必要に身体的現実感をもって応ずる方法であり、この現実感の獲得により「生産構成」は真に人間生活に即したものになると考えられた。たとえば建築の造形はあくまで「生産構成」なのであって、「抽象構成」である造形練習は機能に応じた建築造形を可能にする「予備練習」として、建築の造形そのものとは区別されている。

2-2. 活動各期の内容と特徴

『建築工芸アイシーオール』の全号を通覧して「学校」の生徒募集広告と関連記事から「学校」の内容とその変遷をたどる。【表-1】にみるように、教育計画の発表には重複や変更があり試行錯誤の跡が窺われるが、それら変動を

整理するとカリキュラムは最終的に【表-2】【表-3】のように実施されたと思われる。これらから川喜田のデザイン教育活動は、1932（昭和7）年6月より1935（昭和10）年12月まで続き、休止をはさんで1936（昭和11）年5月に再開の予定であったことがわかる。しかし実際に再開されたか否かについては手掛かりがないため、本稿では検討の対象から除外した。この活動期間はカリキュラム内容により8期に区分される（【表-2】参照）。以下に各期の内容と特徴を述べる。

I 期 [1932 年 6 月→10 月]

川喜田のデザイン教育活動は、浜田増治主宰の商業美術学校の別科新建築工芸科として開始される。目的として「新しい時代にたつ建築と工芸のすぐれた設計家を理論的に技術的に養成する」と述べられている点、専門教科がすべて建築分野である点、さらに入学資格を「^{▽▽}少くも建築の初歩を学ばれた人」としている点に、建築専門教育志向が窺われる。「抽象構成」である「構成基礎教育」は予備教育として「生産構成」との一貫履修となっている。指導者は川喜田のほか、市浦健、牧野正己、講師として土浦亀城。指導者と講師の区別について明記はないが、講師は非常勤と推測される。担当科目の明記はない。なお予定の3学期は実施されず、代わってII期の1学期が開始された。

II 期 [1932 年 11 月→1933 年 3 月]

商業美術学校の移転により同校が使用していた銀座・三ツ喜ビルの一室があり、川喜田はそこに専用の活動の場を得る。そこで、それまで自宅に置いていた新建築工芸研究所をこのビルに移し、その主たる事業として「学校」の運営を位置づけ、銀座・新建築工芸研究講習所と名乗る。川喜田はこの場所を講習日以外は生徒をはじめアイシーオール会員、新建築工芸研究所同人に開放し、交流の場にしようと考えていた。さらに、アイシーオール地方支部との連携、ニュースやガリ版の発行、一般向けの講演会の開催など、組織としての充実をみせる。内容は基本的にI期を踏襲。指導者は川喜田・市浦・牧野。新建築工

芸独乙語科の担当は当時ドイツ大使館工芸美術顧問という三澤操。なお3学期は完全には実施されなかったようである。

Ⅲ期 [1933年5月→11月]

銀座・新建築工芸研究講習所は1933(昭和8)年4月頃に新建築工芸学院と改称する。講習所の紹介に「新しい図案家・手芸家・商業美術家・工芸家・演出家・舞台装置家・園芸家・写真家・建築設計家・最後に美術教育家を志望される方」とあることから、「生産構成」の範囲が広がったことがわかる。また「抽象構成」である基礎教育は、「小学教育に於て、既に行きづまってゐる図画・手工の教育に全く新しい光を投げかけるもの」と説明されている。これは1932(昭和7)年7月頃から初等教育において美術教諭の間で高まっていた構成教育に対する反響を反映させたものと推量される。指導者として、川喜田・市浦・牧野以外に次の名前が挙がっている。建築/岡田哲郎, デッサン/橋本徹郎, デッサン・クロッキー/宮本三郎, 彫塑一般/新海覚雄, 色彩学/田中忠雄, 造園一般/西川友孝, 舞台演出/園池公功, 舞台構造史/野崎紹夫, 写真・舞台装置/山脇巖, 手芸/島あふい。この内、橋本・園池はⅢ期以降も学院に関わるが、その他の人びとが実際にどれほどの度合いで学院に関わったかは不詳。

Ⅳ期 [1934年1月→4月]

Ⅲ期2学期のカリキュラムに未分化のまま含まれていた専門分野が独立学科となる。さらに、Ⅲ期までは共通教科だった構成教育が独立設置される。この構成教育科は「全科を貫く技術の根底」として、専門教科と併せて履修することが勧められている。しかし一方、この教科の独立設置は構成教育のみの履修を容易にするわけで、前述した小学校教員の間での反響に対する配慮の具体化と考えられる。その結果「生産構成」の範囲拡大が編成上でも明確になったと同時に、「抽象構成」は予備教育としての位置づけを残しながらも、それ自身を目的とする方向が明確になった。指導者は、構成教育科/川喜田, 建築科/

市浦・川喜田、絵画科／橋本・山本亮、劇科／園池、織物科／山脇道子、洋裁科／影山静子。なお、これらの人びと以外に、演劇科ではギリシャ演劇から歌舞伎、舞台照明から劇場経営に至るまで、14の専門分野とその担当者が決められていたが、活動の実態は不明である。

V期 [1934年5月→7月]

絵画科は、実製品製作への志向を加えて工芸美術科と改称、引き続き橋本が担当、演劇科は休止、その他はIV期を踏襲する。生徒募集広告に「我々のシステムの現実的な効果は、益々明瞭に確実に、一般に認識され、あらゆる技術家層、教育家、家庭にまでもグングンいり込んでゆきます」とあり、これまでのような個別の専門家の列記に代わって、技術者・教育家さらに家庭と、その教育対象をより一般化したことが窺われる。指導者は、園池の脱退以外はIV期を踏襲。

VI期 [1934年9月→12月]

建築科・織物科・洋裁科は廃止。演劇科は、発声練習や音の変化に応じた体の動きの練習などを主内容として復活。IV期演劇科の内容と対照的である。また、構成教育科と工芸美術科でも共同で行なう感覚練習が多く、3科全体が、視覚・触覚・聴覚に関する「抽象構成」の性格を強くしている。生徒募集広告に「〈創作と鑑賞のコツ〉を掴みとる学校」とあり。教育対象が「鑑賞」する側にまで広がられている。指導者は、構成教育科／川喜田、工芸美術科／橋本、演劇科／林和。

VII期 [1935年1月→7月]

工芸美術科が廃止され、川喜田担当の構成教育科と林和と川喜田が交替で担当する演劇科の2科編成となる。方針はVI期を踏襲している。生徒募集広告に「形と色と音とを、手でも身体でも自由に駆使出来る人間になりませう。(身体と音、声の訓練の科を仮りに演劇科と名づけます。)」と述べられているとおり、演劇科の具体的内容は「発音の練習」「簡単な音を発して身体を動かす練

習」「セリフと同時に簡単な身振り」などで、専門的な演劇の要素はなく、2科ともその内容は「抽象構成」である。

Ⅷ期 [1935年9月→12月]

演劇科が廃止され、川喜田の担当する構成教育科のみとなる。『建築工芸アイシーオール』誌上での最後の生徒募集広告は第5巻第9号(1935年9月号)で、このⅧ期は1935年C期として9月18日から12月20日までが予定されていた。しかし予定どおり実施されたかどうかはわからない。同誌は第6巻第8号(1936年8月号)まで発行されたが以降は続かず、終刊の告知がないまま結果的に同号で終刊となった。

2-3. 変容の軌跡

以上にみてきた各期の活動内容を、専門学科と感覚訓練、すなわち「生産構成」と「抽象構成」の関係に注目して通覧すると、その変容の軌跡は次のように描ける。

専門学科は、Ⅰ期において建築のみであったのが、Ⅲ期において学科としては未分化ながら、建築・図案・印刷・手芸・服飾・写真・演劇とその範囲を広げ、さらにⅣ期では建築・絵画・演劇・織物・洋裁の各専門分野が独立学科となる。しかし、Ⅵ期では専門分野として始まった工芸美術・演劇の2科が実質的には感覚訓練の性格を強くし、Ⅷ期では編成上でも専門学科はなくなる。すなわち「生産構成」はⅥ期まではその範囲を拡大し、その後は縮小する。

他方感覚訓練は、Ⅰ期からⅢ期までは専門学科の予備教育として位置づけられているが、Ⅳ期において独立学科となる。独立学科となっても他の専門学科と併せて履修することが勧められており予備教育としての性格は保たれているが、一方でこの独立化は感覚訓練そのものを追及しようとする動きの端緒ともなる。Ⅵ期以降は、専門学科の感覚訓練化の傾向が強くなり、Ⅷ期においてこれに一本化する。すなわち、「抽象構成」はⅢ期までは「生産構成」の予備教育と位置づけられたが、Ⅳ期で独立学科となり、その後は「抽象構成」自体が

目的化する。

以上から、川喜田のデザイン教育活動は専門教育としての建築教育から一般教育としての感覚訓練へ、換言すれば「生産構成」から「抽象構成」へと変容したことがわかる。そして、その過程にひとつの変節点が認められる。それは、「生産構成」と「抽象構成」のバランスが逆転するIV期の1934（昭和9）年前半期頃である。

3. 川喜田煉七郎におけるデザイン教育活動の意味

川喜田のデザイン教育活動について、これまでにまず前段階的状況を明らかにし、次いで展開過程をたどった。1節において、第1期の計画案制作活動の最後であると同時に、第2期のデザイン教育活動開始前夜でもある1931（昭和6）年前後の川喜田の問題意識を確認し、デザイン教育活動との関連の可能性を指摘した。そこで本節ではこの点を検討し、第1期から第2期への移行の要因を考察して、川喜田におけるデザイン教育活動の意味づけを試みたい。

1931年前後の川喜田にとっての問題とは、第一に機能主義における造形の理論化、第二に技術の共有による制作の普遍化であった。この問題点に対応する方策を、デザイン教育活動の特質に見い出すことができる。この点に関して川喜田の言説に次の該当箇所を指摘できる。

「例えば建築のデザインを例にとつても、今Aといふ機能に应ずる形を、頭に記憶してゐる形式のたすけなしに、そばから色々つくつてゆく技術は事実上なかなかむづかしい。普通頭にある既成の形（それが機能AでなくBがつくつた形であつても）や所謂トラの巻からヒントを得たりしてでつちあげるが、どうもその機能とピッタリしない事が多い。この場合のテクニックをこうした訓練（「抽象構成」：筆者註）は大いに救つてくれる」¹⁴⁾。

「この練習（「抽象構成」：筆者註）はく機能に应じてどんな形態でも自由に与へられる」といふ技巧を掴むのに相当に役立つ」¹⁵⁾。

「かうした練習（「抽象構成」：筆者註）は個性的な芸術家をつくり上げる代りに、平均した技術家をつくりあげるための進歩した教育法だと云へます。作ったものにアトリエで個人の制作したものゝ様に、特殊な個性がありません。その人だけがもつと云ふ何物もないのです」¹⁶⁾。

「本学院は云わゞ今日のあらゆる新興芸術に於ける構成のプリンシプルを解決させる学校」（中略）と云ふことが出来ます」¹⁷⁾。

「〈構成教育〉とは我々の学校（中略）で実験的に実践してゐる技術教育・技術の共同研究のメソッドです」¹⁸⁾。

ここでは、「抽象構成」を中心とする「構成教育」が造形の理論化と制作の普遍化の基盤となる方法であることが述べられている。すなわち、川喜田のデザイン教育活動は、前述の問題を解決するための活動であったといえる。そして、この問題が第1期活動の機能主義追及の過程で生まれたものであることを考えると、依然として観念的ではあるが、デザイン教育活動はこの追及のための新たな活動形態であったといえよう。

ここで川喜田の第1期における活動形態の変遷を確認しておきたい。川喜田の計画案制作は建築運動に関わることで展開されてきた。最初に関わったのは分離派建築会で、この会の第6回展覧会（1927年）に〈霊楽堂〉を出品する。この頃の建築運動の活動形態は、展覧会において計画案の意想図や粘土模型を発表するというもので、同時期の造形重視傾向と対応している。しかし、前述したような機能主義追及の過程で、計画案が単なる個人的な夢想ではないことを示すために、発表の際にその計画が科学的にも社会的にも合理的であることを示すデータやダイアグラムを示すことが主張されるようになる。川喜田はこれを「レポート」と呼んだ¹⁹⁾。このような内容に、従来の展覧会という活動形態は対応できなくなってくる。さらに次の段階では、制作を実践するための方法が問題となる。川喜田は〈ウクライナ劇場案〉制作の翌年1931年10月の『建築世界』で、東京市庁舎建設計画に関するアンケートに答えて次のように

述べている。「かかる広範囲の新智識の集成における取得には到底、小人数の役人、小人数の技術家の不完全な部分的知識のよくなる所ではない。そこで我々技術家市民は、すべての敬遠をすてて、この共同の動員にしっかりと参加しなければならないのだ。(中略) 建築家は(中略)以上の技術の各々を最も理解した〈構成者〉であり、〈組織者〉でなければならない」²⁰⁾。ここで述べられているのは、特権階級ではない専門技術者と建築家の協同設計体制である。しかし、それは当時では実現不可能であった。そうであれば、問題となるのは技術者・建築家の協同のための方法であり基盤である。このような問題に対しては、それまでの建築運動の活動形態である展覧会では対応できない。そこでは新たな活動形態が求められたはずである。それが教育活動ではなかったか。

川喜田は後に、自己の1920(大正9)年から1935(昭和10)年の活動を回顧して次のように述べている。「建築も造型も内容的にも一つの方向にむかって整備を熱中し始めたのである。目的とか機能とかいう面で、専門的にリアルにそれをつきつめようとすると同時に建築をセンターとする造型が、教育することを活動の中心としてようやく打って出てきたのである」²¹⁾(傍点原文)。文中の「教育することを活動の中心として」とは、まさにこの建築運動としてのデザイン教育活動を意味しているのではないだろうか。

おわりに

本稿では、川喜田煉七郎のデザイン教育活動の消長を、その前段階期である1930(昭和5)年頃から新建築工芸学院の終焉期である1935(昭和10)年末までを視野に収めて検討してきた。特に、商業美術学校別科新建築工芸科から新建築工芸学院にいたるデザイン教育活動の展開については、そのカリキュラムの変容を詳細に跡づけた。さらに、デザイン教育活動をこれに先立つ計画案制作活動と連続的にみることで、この活動が機能主義の制作理論追及のひとつの形態であることを指摘した。

デザイン教育のカリキュラムについてはある程度まで明らかにし得たと考えるが、その展開を川喜田の活動全体の中で位置づける作業は、デザイン教育活動への導入部のみを扱うにとどまり、活動終了前後の状況についてはふれることができなかった。その意味では、消長はその一端しか明らかにし得ていない。後者については、川喜田自身が「構成教育から構作教育へ」²²⁾と表現する興味深い時期であるが、現時点ではまだ不明な点が多い。また、川喜田の「構成」概念やカリキュラムについては、バウハウスの教育プログラムやモホリ＝ナギの思想との比較検討が重要と思われる。これらについては今後の課題としたい。

註

- 1) 佐々木宏「欧米の影響下における建築の展開」(『新建築』第39巻第6号, 1964年6月), 村松貞次郎「日本建築家山脈X／川喜田煉七郎」(『新建築』第39巻第11号, 1964年11月), 出原栄一「日本の近代デザイン史7 DWB——バウハウスの影響」(『デザイン』1962年第34号), 三村翰「川喜田煉七郎論(一)～(十一)」(『商店建築』第21巻第11号・1976年9月より第22巻第15号・1977年12月まで断続的に連載), 山口廣「日本近代建築／陰の系譜」(『日本近代建築史再考』新建築社, 1977年), 近江栄『建築設計競技』鹿島出版会, 1986年, 勝村謙一「日本のデザイン国際交流史第5回バウハウスの影響」(『Design Scene』No.18, 1990年7月)など。
また川喜田と同時代人による回顧的な言及については次のものがある。
仲田定之助「日本の近代デザイン史7 ワイマールのバウハウスを訪ねて」(『デザイン』1962年第34号), 蔵田周忠『近代建築史』相模書房, 1965年, 高山英華「近代都市計画史第1部：戦前篇 代々木・原宿がひとつの限界だった(きき手：磯崎新)」(『都市住宅』第102号, 1964年4月), 桑沢洋子「日本デザイン前史の人々」(『日本デザイン小史』ダヴィッド社, 1970年, 所収), 山脇巖『櫻 続』井上書院, 1973年, 「山口文象(聞き手：佐々木宏)」(佐々木宏『近代建築の目撃者』新建築社, 1977年), 西山外三「一建築学徒の回想 第6章 青年建築家クラブ(つづき)」(『近代建築』第32巻第3号, 1978年3月)
- 2) 筆者は、川喜田煉七郎の1924年から1930年までの活動について、劇場計画面を中心に跡づけている。拙稿「川喜田煉七郎による二つの音楽堂計画面について」(『日本建築学

会 1989 年度大会 [九州] 学術講演梗概集 F] 1989 年), 同「川喜田煉七郎による劇場計画案の展開過程 (『日本建築学会近畿支部研究報告集第 30 号・計画系] 1990 年), 同「川喜田煉七郎の〈ウクライナ劇場国際設計競技応募案〉とその建築思想」(『日本建築学会 1990 年度大会 [中国] 学術講演梗概集 F] 1990 年)

- 3) たとえば, 村松前掲論文, 山口前掲論文など。
- 4) 川喜田「ウクライナ劇場のコンペチションに関連してうつたへる」(『建築新潮』第 12 年第 6 号, 1931 年 6 月) p. 9
- 5) 川喜田生「無題」(『建築畫報』第 20 巻 7 号, 1929 年 7 月) p. 20
- 6) 川喜田「ウクライナ劇場の応募案について」(『建築畫報』第 22 巻第 6 号, 1931 年 6 月) p. 3
- 7) 「時事時言」(『建築世界』第 25 巻第 7 号, 1931 年 7 月) p. 205
- 8) 学校美術協会出版部発行
- 9) このような傾向には次の例がある。「構成教育 (造型教育と言う言葉をこのころから意識的にこう呼ぶことにしていた)」村松貞次郎「日本建築家山脈 X / 川喜田煉七郎」(『新建築』第 39 巻第 11 号, 1964 年 11 月)。「勝井武雄、川喜田煉七郎は、総合造形教育を旨として構成教育を唱えた」(大阪児童美術研究会『新美術教育基本用語辞典』明治図書出版、1982 年) p. 34。
- 10) 川喜田煉七郎「〈構成教育〉について」(『建築工芸アイシーオール』第 2 巻第 11 号, 1932 年 11 月) p. 13
- 11) 同前, p. 17
- 12) 同前, p. 10
- 13) しかし, 高橋寿男・西山卯三らの青年建築家クラブからの構成教育批判は, この造形の自己目的化をめぐってであった。この経緯について, 同クラブ関係者側からの記述として次の資料がある。高橋寿男「青年建築家クラブをかえりみて」(高橋著・西山卯三編『建築住宅・都市計画』相模書房, 1962 年, 所収), 西山卯三「一建築学徒の回想 第 6 章 青年建家クラブ (つづき)」(『近代建築』第 32 巻第 3 号, 1978 年 3 月), クラブ員「青年建家クラブ その後の発展」(『国際建築』第 9 巻第 12 号, 1933 年 12 月)
- 14) 川喜田「構成教育の記録 3」(『アイシーオール』第 4 巻第 7 号, 1934 年 7 月) pp. 11-12
- 15) 同「シュパヌンク No. 1」(『アイシーオール』第 2 巻第 11 号, 1932 年 11 月) p. 25
- 16) 同前, p. 17
- 17) 「銀座新建築工芸学院の教課について」(『アイシーオール』第 3 巻第 4 号, 1933 年 4

月) p. 69

- 18) 川喜田「〈構成教育〉について」(『アイシーオール』第2巻第11号, 1932年11月) p. 1
- 19) 同「所謂〈レポート〉の型式について」(『建築新潮』第12年第1号 1931年1月)
- 20) 同「東京市庁舎建築に就て」(『建築世界』第25巻第10号, 1931年10月) p. 12
- 21) 川喜田・高篠『世界の旅 ショーウィンドー』K・Tデザインセンター, 1962年,
p. 157
- 22) 川喜田『構作技術大系』図画工作株式会社, 1942年, p. 17

(1990年9月20日受理)

(うめみや・ひろみつ 神戸大学大学院生)